



「世田谷区子どもの権利条例」と学校の自治／Rights（権利）と Responsibilities（責務）

校長 風間 浩也

1月の朝礼で今年度中に区議会で可決される予定の「世田谷区子どもの権利条例」の前文にある「大人へのメッセージ」という箇所を紹介しました。条例には、「私たちの言葉や思いをしっかりと受け止め、『否定』じゃなく、『肯定』してください。大人達に意見や思いを尊重してもらえて、何かを恐れずに自由に発言や表現ができる環境がほしいです。」と書かれています。私は、世田谷区立学校の校長として、施行された区の条例の趣旨を芦花中学校において実現させていきたいと思っています。そのためには、先ほど紹介した文章の実現に向けて、生徒による「学校の自治」を確立することが必要だと考えています。

今、「学校の自治」の確立の一環として、生徒会では、制服の着用ルールについて検討をしたところです。また、生徒の意見を取り入れやすくするために、「目安箱」の電子化などを進めたり、来年度の「カジュアルデー」をどうしていくか生徒自身が考える取組である「標準服を考える Week」を生徒会が企画したりしています。

私は、もっと生徒の考えを取り入れて、生徒自身の手で学校生活を作ってもらいたいと思っています。しかし、そのためには、生徒自身の社会性をもっともっと高め、自身と周りのことについて、深く考察できる人になっていかなければならぬとも考えています。11月の朝礼では、「自由には責任が伴う」ということを話しました。自分の自由を主張する際には、誰かの自由を侵害してはならないということも、今一度、深く心に留めてもらいたいと思います。

ところで、「日本の学校のきまり」についてどのような印象をもっているでしょうか？諸外国と比較して、厳しいと思っている人が多いのではないでしょうか。かつて日本の学校にあったような「理不尽な規則」は、もちろん認められるものではありませんが、実は、諸外国の学校の規則の方が断然厳しく細かい場合があることを紹介します。

例えば、私が訪問したことのあるオーストラリアのクイーンズランド州にある公立学校”The Ipswich State High School”の場合を紹介します。その学校では、“Student Code of Conduct”という「生徒の行動規範」というものが示されています。どれくらいの分量があるかというと、実に47ページ渡って詳細な「きまり」が書かれています。(ただし、いわゆる校則だけでなく、学校で学ぶための方法や心構えなども含まれています。ぜひネットでご覧ください。)

私は、現地の教育委員会の方や校長先生方に、なんでこんなに細かい規則があるのかを訊ねたところ、返ってきた答えはとても興味深いものでした。「学校のきまりは、学校の安全性と教育権の確保のため、そして、全ての生徒の多様性を尊重するとともに、公平性と平等性を保障するために定めている」という趣旨的回答でした。

オーストラリアは、多民族・多文化の国です。欧米系だけでなく、アジア系、アフリカ系、ポリネシア系、そして先住民族であるアボリジニをルーツにもつ人など実に多彩です。その中で、公立学校においては、経済格差の問題や差別の問題、家庭の問題、いじめや不登校の他、日本の学校と同じか、それ以上に重い教育課題があります。だからこそ、まず、他の人の教育権を侵さない、授業妨害をしないための厳しいルールがあり、さらには家庭ごとの経済格差や様々な違いが教育の現場で現れないような配慮があり、そのための公平性、平等性が何よりも重視されています。例えば、他の学校の規則にも、「通学靴は、黒の無地、革かビニール製。黒紐、もしくは、ベルクロのみ」とあり、芦花中の生徒が普段身に付けている、普通のスポーツブランドでも、ロゴやマークの見えるものは、放課後のクラブ活動以外では禁止で、持ち物や身に付ける物などの部分で、公平性や平等性を担保することが非常に徹底していました。

さて、話を戻すと、私は何もルールを海外と同じに細かくしようと言っているわけではありません。しかし、学校のきまりを考える上で、これからますます多様性や独自性が進んでいく世の中において、日本だけではなく、様々な国の学校の状況や教育環境についても学び、より高い視座から芦花中にとってふさわしいルールを考えていく必要があると思っています。最初に紹介したクイーンズランド州の学校の行動規範の冒頭には、Rights（権利）と Responsibilities（責務/義務）というものが並べて示されています。「権利」の最初の部分には、「個人は、リスペクトされ、尊重される」とあり、この考えは、「世田谷区子どもの権利条例」と同じ趣旨です。そして、併記されている「義務」の部分には、「他の人の違いと多様性に価値を置き、他の人のユニークな属性、スキル、能力を認めること」と書いてあります。

このように、「権利」と「義務」を常に並べるような考え方では、芦花中の生徒にぜひ身に付けてほしいところです。自分の権利が認められるには、他の人のことも差別せず同様に認めなければならないということです。自由や権利には責任が伴うということ、学校という公共の場において、なんでもありの個人の自由や権利の主張のみが必ずしも正解ではない、それによって、差別や格差が助長されることもある、ということは身に付けてほしい考え方です。

これから生徒自身が、芦花中のきまりを考える際には、ぜひ全ての人の多様性や価値を認めあえるような「権利」とそれを支える「義務」があるという視点をもってほしいと思います。その上で、生徒自身の手による学校の自治が実現するように願っています。